

# 8

# 竹内農場西洋館の建築様式

西洋館は現在赤レンガの壁面と御影石の基壇部分のみを残すばかりとなっています。設計図は未だ見つからず、設計者もわかっていません。残された遺構をつぶさに観察してみると、竹内明太郎がどのような目的で西洋館を作ったのか、その手がかりをつかめるかもしれません。

## 竹内農場西洋館の概要

竣工年：大正9（1920）年

設計請負：太田圓七建築部

建物構造・規模

東棟（住居）

建物構造：レンガ造2階建地下1階

寄棟屋根瓦葺

1階床面積：67.09㎡

2階床面積：67.09㎡

現況最高高さ：7m

東棟北側下屋

建物構造：木造1階建、片流れ屋根瓦葺

建物面積：23.63㎡（推定）

西棟

建物構造：レンガ造1階建、切妻屋根瓦葺

床面積：67.61㎡

※『竹内農場赤レンガ西洋館の平面図等作成及び保存に係る調査報告書』より



写真1 竹内農場の西洋館竣工記念写真（大正9（1920）年 龍ヶ崎市教育委員会所蔵）

西棟平屋部分は、平成29（2017）年の調査では建築に係る請求書の記載や昭和に入ってから管理を任された人物と竹内家がやりとりした手紙などから蚕室とみなされ、レンガ造の炉（蚕室を暖めるものか）のようなものが2基ありますが、当初より蚕室として使用されたかどうかは不明です。

内装については、写真等、往時の様子を知る手がかりがないため、現状から推測するしかありませんが、内壁は白漆喰で化粧され、天井部分には当時の西洋館では一般的であった漆喰装飾が施されていたと思われます。

## 西洋館の現状

現在、建物の木材部分、梁、根太、床面といった主要な構造物は、腐朽、あるいは持ち去られ、屋根も完全に落ちてしまっています。昭和14（1939）年の記録によれば建築資材や備品、什器が盗難にあい、屋根の

建物の構造は、レンガのこぐちとながてを交互に積んでいくオランダ積みによるもので、鉄骨や木骨を用いない純粹なレンガ造りとなっています。東棟の1階部分は、ホールと居室、かまどのある土間、そしてトイレ、浴室、台所の下屋が付属していました。また、2階部分は3間あり、それぞれ居室となっていたと考えられます。玄関を入ったホール部分には、他の西洋館ではあまり見られない地階があり、この西洋館の大きな特徴となっています。

崩落は昭和 20 年代には既に始まっていたと考えられます。また、レンガの壁も一部亀裂が入っている状態です。外壁にはここ数年のものと思われるスプレーによる落書きも散見され、維持管理の仕方は喫緊きつぎんの課題となっています。

## 西洋館としての建築様式

竹内農場西洋館は基壇部分に打ち欠いた面を見せる白御影石の板を貼り、その上に赤レンガを積んでいます(写真2)。また、窓の底部に白御影石を配置しており、赤と白のコントラストの美しい建物です。こうした赤レンガと白御影石の組み合わせは、明治期に流行したゴシックリバイバルやネオ・バロック様式で多用されたもので、本西洋館も同じ流れに位置付けることができます。壁面上部、屋根との接点である軒下部分にはデンティルと呼ばれるレンガによる装飾が続いており(写真3)、こちらは中世の城郭に見られる様式で、ロマネスク的な装飾となっているといえます。窓などの開口部は、アーチ構造になっておりますが、通常のアーチではなく、写真4のように隠しアーチと扁平アーチを組み合わせた手間のかかるものになっており、レンガ積みの美しさが際立っています。

マヌ都市建築研究所による『竹内農場赤レンガ西洋館の平面図等作成及び保存に係る調査報告書』では、本西洋館を日本製の屋根瓦を用いているところから和洋の「折衷様式」と位置付けていますが、西洋建築におけるいくつかの様式が複合的に交じり合い、日本的な解釈の中で形をなした「折衷様式」ということもできます。

1910～20年代は、西洋建築史的には折衷様式からモダニズムに入っていく過渡期にあり、日本においてもややタイムラグはあるものの、およそ同じような過程を経ています。日本の近代住宅建築は、この時期、洋風住宅が中流階級の郊外型住宅(田園調布、常盤台などの)として次々と建築されていきました。こうした個人住宅の多くが、木造にタイルやレンガ、石を部分的にあしらった西洋風の建物であったことに比べ、竹内農場西洋館は明治期の建築に見られるディテールを引き継ぎ、や



写真2 (上) 白御影石による基壇装飾。 3 (左下) 西棟デンティル部分。 4 (右下) 隠しアーチと扁平アーチの組み合わせ。

や古様を示しています。大正年間、住宅建築の改良運動が行われ、生活本位の住宅が目指された中で、この西洋館は、純粋レンガ造であり住宅と呼ぶにはあまりにも重厚で大きな建物となっています。

建物の印象は、居館でありながら、倉庫や学校のような雰囲気もあり、むしろ施設的なイメージすらあります。明治、大正期の紳士貴顕きげんが住まう西洋館の多くが居室に暖炉を備え、煙突を設置していましたが、本西洋館の古写真からは居室の煙突は確認できません。暖房という居住性に関わる要素が抜けているのも特異なことといえましょう。さらに、大空間の地下室、蚕室とみなされる西棟など、住宅におよそ不必要な空間の存在は、なかなか説明が付きません。しかしながら、竹内農場という大きな枠組みで考えた時、この西洋館がどのような役割を果たし得るのか再検討することによって見えてくるものがあるように思われます。今後、古写真や文書等の発見により、竹内明太郎による農場の構想が明らかになった時、西洋館を正しく位置付けることができると考えています。